

土居健郎著

『臨床精神医学の方法』

評者・小林隆児



著者は精神医学のみならず、人間理解の学際的領域においてわが国独特の心性である「甘え」の重要性と普遍性を世界に広めたことでつとに有名だが、昨年乳幼児精神保健領域でもその功績が認められ、横浜市で開催された世界乳幼児精神保健学会ではスピッツ賞の榮譽に浴している。

土居の臨床の神髄は、徹底して日本語で考えることにある。単に外国から新しい概念を導入して事足れりとするのではなく、それが日本文化の中ではどのような現象として、どのような「ことば」で切り取られてきたか、そのことを明らかにすることで初めてそのこころの源泉をたどることができよう。そうした探索なくして、日本人が日本人の患者の治療することはできないと喝破する。人間理解に対する徹底した日本語へのこだわりは、日本文化の底流に息づいている情動の動き、

「甘え」に着目してきたことから生まれている。「ヴァーバル・コミュニケーションだけに頼らないで、ノンヴァーバル・コミュニケーションを大事にしてそれをキャッチできるだけのセンスを養っていただきたい」との読者へのメッセージは著者の揺るぎない信念である。

一二の章で構成されているが、「臨床精神医学の方法論」の章は、著者が「一生かけてやってきたこと」が要約されており、とりわけ感動的である。「甘え」はつねに他者を必要とするために、アンビヴァレンスを伴う。それゆえ「甘え」にまつわる体験はデリケートなこころの動きを引き起こす。それが後に、心身の不調を呈した患者に、治療者に対する錯綜した構えをもたらす。そのことがさまざまな精神障害において患者・治療者の関係性の特徴として映し出されるという。「甘え」

の世界の動きをみることは必然的に関係性に着目することなのだ。

治療者が患者を理解するためには、患者に同一化できなければならぬ。同一化できるということは「甘え」を知っていることだ。そのことよって初めて患者のほんのわずかな「甘え」の動きにも、治療者はそれを自覚することができる。患者・治療者関係が成立するためには、両者間に同一化、すなわち心理的な融合が起こる。それは「甘え」が起きていることなのだ。ただ、治療者は単に患者に融合するだけではなく、自分を見失うことなく治療者としての存在を明確にし続けることの大切さをも強調する。

最後に精神科医として臨床能力を磨くコツが述べられている。転移現象と同じ論理構造をもつ「metaphor」を理解できることは転移理解のセンスを磨くうえでとても大切だという。「metaphor」において喩えられるものと喩えるものとの関係をつないでいるものは「甘え」の動きと共通していることを感じ取ったからなのだろう。評者流に言い換えれば力動感(vitality affects)に鋭敏になれるということだ。人間の他者に向けるこころの動き、すなわち「甘え」が関係性の基盤を形成

しているが、その動きの察知を可能にしているのが力動感、つまりは原初の知覚なのである。患者・治療者関係において、このような非言語的次元で捉えた知見は自然科学でのエヴィデンスと同等の価値をもつもので、それを大切にしていくことで十分に臨床精神医学も学問足りうるという。人間科学におけるエヴィデンスとは関係の中で捉えたものこそ最も重要なのだと述べて締めくくっている。

本稿をまとめていた最中に、著者の計報に接した。本書は遺書となった。改めて読み直してみると、「知的興奮を伴わない臨床はその名に値しない」「精神科は絶対に精神療法的なものが入らなければ嘘だ……患者と話ができない医者は私は獣医だと思いません」など、著者の率直な思いが随所で熱く語られている。著者は病の身でありながら、渾身の力を振り絞って本書の推敲に当たったのではないか。遺産となった「甘え」理論を著者の「専売特許とすることなく……大いに吟味し批判し使用」することを著者はこころから願っている。われわれ日本人に残された重い課題である。

(こばやし・りゅうじ／大正大学人間学部)